

浪江町に想う

1989年経済学部 望月行夫(東京から参加)

二車線の道路、人口一人あたりの飲食店と小売店数が全国屈指の商店街を一台の民間警備会社の車が過ぎ去ってゆく。人影は私達だけ、森閑とした街並みに柔らかな秋の陽射しが差し込んでいるが、その景色は穏やかさを乗り越えて寂寥感が漂う。

2016年、福島県浪江町。

「駅前を通りが街の中心。金物屋さん、八百屋さん、魚屋さん、文房具屋さん、本屋さんなどが軒を連ね、毎日、通勤や通学、買い物などで大勢の人が行き交っていました。けれども、あの日を境に駅は津波で流され、鉄道も止まったままで、商店街の痕跡は何も残っていません」と往時を懐かしみながら地元ガイドの方が語る。

2013年、宮城県陸前高田市。

どちらも2011年の東日本大震災後の景色です。

立命館大学校友会では2012年より毎年、東北三県の被災地の視察をし、現地の方の話を聞くツアーを開催しています。2016年秋、私は福島県のツアーに申し込み、浜通りと呼ばれる地域を訪ねました。

破損している建物が点在しつつも街並みを保っている浪江町と、津波にえぐられた陸前高田市では街の様相は全く異なりますが、人の営みが凍結した点では共通です。しかしながら、同じ被災地であっても原発事故を被った浪江町の特異さには更なる震撼を覚えました。

被爆国である日本にとって原子力発電は核の平和利用の象徴である側面を有し、地域の雇用を支え、産業の一角を担っていました。浪江町で第三次産業が際立っていたのは福島第一原発で働く人たちが利用していたからと聞きます。浪江町に限らず事故の起こる前の原発保有地では、その恩恵をごく自然に受け止めていたのかもしれない。

ところが、万全の安全対策を講じていたはずの福島第一原発は、地震をきっかけに水素爆発を引き起こし、科学技術の牙城は崩壊しました。1957年のウィンズケール(イギリス)、1979年のスリーマイル島(アメリカ)、1986年のチェルノブイリ(旧ソ連)、1999年の東海村(日本)と各地で事故が発生しているにも関わらず原発は動き続け、今回の事故が終息していないにも関わらず日本では再稼働が検討され、輸出さえしようとしています。人々の人生を狂わせ、膨大な時間と費用を要する廃炉への道程。ローコストにしてクリーンなエネルギーが一変して、かくも深刻な事態をもたらしたことを突きつけられた私たちは、エネルギーと原子力の問題について真摯に向き合う必要に迫られています。

宿泊先で福島大学中井勝己学長(校友)のお話を伺いました。原発から避難した人たちの中には、都会の暮らしに慣れた人、健康被害の不安に抗えない人、子どもの進学や仕事によって帰郷を躊躇する人が多いそうです。私たちを案内して下さった浪江町副町長は、新たな町づくりに向けて、様々なプランを立てている説明していました。原発に変わる産業を創出し、2010年、20,908人だった町民は戻ってくるのでしょうか。今回のツアーを通じて、遠かった浪江町を意識せざるを得なくなりました。

浪江町の困難は決して浪江町だけのものではありません。誰もが心に留め置き、繰り返さないよう常に考えるべき課題です。そして、原子力の問題だけではなく、あらゆる科学技術は使いようによって人間に悲劇をもたらします。戦争はその最たるものであることに異論はないでしょう。

浪江町を視察していて、ある家の前で参加者の目が釘付けになりました。入口ドアの脇のガラスが割られていたのです。放射線被害の恐れのある浪江町に跋扈した我欲の権化も、私たちと同じ人間。そう、どんなに優れた技術でも扱うのは人間であり、どんなに清廉潔白な運営者でも何らかの理由で誤った方向に向かうこともあれば、慎重完璧な管理者でもミスを犯す可能性は否定できません。人々が避難し、真空状態のような浪江町は、人間と科学技術の関わり方、人間自身のあり方について思索せよ訴えています。

浪江町の再出発に全力を傾ける人たち、Jビレッジを拠点に廃炉に立ち向かう人たち、福島の未来を考察する大学人、観光によって地域力を発信するスパリゾートハワイアンズ、風評を吹き飛ばす気概に満ちた農家、復興の光源となったアクアマリン、津波と風評被害と闘う小名浜港の漁業関係者、そして、立命館大学福島県校友会の皆さん。福島の旅は圧倒的な困難にあっても、人間が人間であることの尊さを再認識させてくれました。この体験をより多くの人たちに伝えることを誓うと共に、本ツアーに携わった全ての関係者に感謝の意を捧げます。有難うございました。

以上